

英語音声学のオンライン授業の可能性

—授業評価からの考察—

Possibilities of Online English Phonetics Course:
Insights from Course Evaluation

森本 俊

Shun Morimoto

Keywords : 英語音声学、オンライン授業、授業評価

1. はじめに

1.1 英語教員養成課程における英語音声学の学修について

現在我が国の英語教育は、新学習指導要領の実施や大学入試改革に代表される大きな変革期を迎えている。その中のキーワードとして「主体的・対話的で深い学び」や「領域統合型」、「発信型」等が挙げられる。また、高等学校の「コミュニケーション英語」の科目名称が「英語コミュニケーション」へ変更になるなど、実践的なコミュニケーション力の育成を重視する英語教育が志向されている。平成30年に告示された「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編 英語編」では、これまでの英語教育において「やり取り」や「即興性」を意識した言語活動が十分ではないこと、読んだことについて意見を述べ合うなど複数の領域を結び付けた言語活動が適切に行われていないことが課題として指摘されている（文部科学省、2018, p. 6）。上記の活動は機能的なコミュニケーション力を育成する上で必要不可欠であるが、その基盤に音声に関する知識・技能があることを忘れてはならない。

これまでの我が国の英語教育において音声面の指導は必ずしも十分行われてこなかったことが先行研究において指摘されている（河内山他、2011；柴田他、2008；手島、2011；松宮、2013）。その主たる要因として挙げられるのが、教師が音声指導に対して抱く不安や自信の無さである。柴田他（2008）は、高知県内の英語教員の音声指導に関する実態調査を行い、回答者の84.4%が発音指導を難しいと感じていたことを報告した。また、音声指導に自信がないと回答した教員は244名中91名（40.6%）であり、音声指導をしていないと回答した教員は49名にも及んだ。同様の傾向はUchida and Sugimoto (2019) の調査においても見られ、対象となった中学校教員のうち、発音全般について「自信がある」と回答した者が50%に留まっていたことが報告された。

では、なぜ多くの教員が音声指導に対して不安を感じ、自信を欠くのであろうか。その要因として、教師自身が中学校から大学における英語の授業で音声面での指導を受けてこなかったことや、入職後に音声面に関する研修を受ける機会がないことが挙げられる（折井、2015；河内山他、2011；河内山他、2013）。河内山他（2011）は、兵庫県下・大阪府下の小学校教員229名を対象に音読指導に関するアンケート調査を実施した。その結果、中・高・大で発音の指導を十分に受けていないと回答した教員は、中・高時代で72%、大学で84%であった。また、現職の立場で発音指導を含む英語教育の研修を受けたことがあるかという設問に対しては、64%の教員が「ない」と回答した。同研究では、中学校の現職教員に対しても同様の調査を

行ったが、そこでも中・高で十分な発音指導を受けていないと感じると回答した教員が全体の84%であり、現職研修において発音指導を受けたことが無いと回答した教員が80%を占める結果となった。

音声指導に対する不安の源泉となるいまひとつの要因として、これまでの大学の英語科教員養成課程において英語音声学の履修が必修化されていなかったことが挙げられる(河内山他, 2013)。そのため、英語の音声に関する理論や発音法に関する知識を学ぶことなく教壇に立つ教員が多く輩出されてきた。Uchida and Sugimoto (2019) が明らかにしたように、英語の音声に関する知識やスキル、自信を欠く教員は教室内の音声指導に対して非積極的になる傾向が高くなる。河内山他(2016)は、そのような教師に英語を教わった生徒の一部が大学に進学し、英語音声学について十分な知識を学ばずに教員免許状を取得し、教育現場に入るという「悪循環」(p. 155)を断ち切ることが急務であると主張している。ただし、一口に英語音声学の授業と言っても、理論を重視したものから教育的側面を重視したものまでさまざまなバリエーションが考えられるため、杉本・内田(2020)は、「教職音声学」という概念を提唱し、教員養成の視点から学修内容を精査する必要性を述べている。

以上の流れを受け、2017年5月に教員免許状の取得において音声に関する科目の履修を必須条件とする提言が日本音声学会によって発表された(日本音声学会, 2017)。また、同年、「文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成28年度報告書」(東京学芸大学, 2017)において、英語教員養成及び英語教員研修のコア・カリキュラムが公表され、英語教員養成課程において英語の音声の仕組みや音声の指導法が学修項目に含まれることとなった。

1.2 English Phoneticsの授業について

上記の流れを受け、玉川大学文学部英語教育学科では2019年度入学生より、英語音声学を扱うEnglish Phoneticsを必修科目として設定した。本科目は原則として1年次の春に履修する1単位100分の科目である。筆者は2020年度より本科目の担当者となった。本科目は学科専門科目であると同時に、教職課程における「教科及び教科の指導法に関する科目」でもある。英語の基本的な音声構造を理解し、英語指導に耐え得る発音を身につけることを到達目標として掲げている。授業では、音声学の基礎知識(音声器官、有声音と無声音等)、子音の発音、母音の発音、音声変化、リズムとイントネーション、アメリカ英語とイギリス英語、音声指導と学習を扱い、コア・カリキュラムで示されている項目をカバーした。また、第8回に子音の発音の理解度確認テスト、第15回に期末試験を実施した。

1.3 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う授業のオンライン化

2020年に世界規模で発生した新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、本学では2020年度春 Semesterの全授業がオンライン対応となった。English Phoneticsについても、15回全てを、Zoomを使用したリアルタイム型の授業で実施した。

学生には予めBlackboardにアップされた配布資料を印刷の上出席するよう指示し、授業は担当者が作成したPowerPointスライドをベースとして進めた。各回の授業は原則として(1)教師による解説、(2)クラス全体での発音練習、(3)個人ベースの発音練習及びフィードバック、(4)エクササイズ(ミニマル・ペアを使った音の聞き分け、文単位でのディクテーション及び発音練習等)、(5)ブレイクアウトセッション機能を使ったペアまたはグループ練習、という流れで展開した。尚、授業では毎回発音練習を行うため、学生には授業中特段の事情が無い限りカメラを常時オンにするよう求めた。

1.4 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では以下の2点を調査することを目的とした。第一に、English Phoneticsの授業内容を学生がどのように評価するかを検証することである。前述の通り、本科目は開講2年目であり、

今年度より筆者が担当者となったことから、発展途上の段階にある。学修内容の選択と配列や授業に対する学生の満足度、必修科目としての位置づけの是非といった観点から多角的な検証を行い、次年度以降の充実化を図る上での基礎データとしたい。第二の目的は、英語音声学におけるオンライン授業の可能性を考察することである。新型コロナウイルス感染症拡大以前は、英語音声学の授業は対面で行うことが前提となっていたため、全面的にオンライン化した授業実践についての事例は皆無に等しい。本研究を通して英語音声学におけるオンライン授業のメリット及びデメリットを探索し、学生による評価と併せて今後の可能性を探求したい。

2. 調査の概要

2.1 参加者

本調査の対象者は、筆者が担当する English Phonetics の授業を2020年度春semesterに受講した、玉川大学文学部英語教育学科1年生95名であった（男子：58名、女子：36名）。授業は1・2組と3・4組の2クラス展開であり、履修登録者はそれぞれ47名と48名であった。履修登録者のうち、計93名（男子：57名、女子：36名）がアンケートに回答した（回答率：97.9%）。回答者の所属コースの内訳は、英語教員養成コースが71名（76.3%）、ELFコミュニケーションコースが22名（23.7%）であった。

2.2 材料

「2020年度春semester English Phonetics 授業アンケート」を作成した。本アンケートは、計6パートから構成されており、各パートの詳細は表1の通りである。

表1 アンケートの構成

Part	テーマ	設問数	形式	内容
1	英語音声学に対するイメージ	2	記述式	授業の受講前後における英語音声学に対するイメージを記述する
2	授業内容の評価	22	多肢選択式 (一部記述式)	授業内容に関する文への同意度を5段階で判定する
3	オンライン授業①	6	多肢選択式 記述式	オンライン授業の受講環境についての質問に答える
4	オンライン授業②	6	多肢選択式 (一部記述式)	オンライン授業におけるトラブルの発生状況について5段階で判定する
5	オンライン授業③	19	多肢選択式 (一部記述式)	オンライン授業の学修プロセスに関する文への同意度を5段階で判定する
6	その他授業全般	3	記述式	Part 1～5の内容以外の授業全般に関する質問に答える

2.3 手続き

本アンケートは第15回授業終了時に学生に提示し、授業時間外で回答するよう求めた。アンケートへの回答は任意であり、個人情報は一切公開されないこと及び回答内容が成績評価に一切影響を与えない旨を説明し、同意を得た。

アンケートはGoogle Formsを使って作成され、学生はBlackboard上のURLリンクを通して回答を行った。アンケートの所要時間は約15分であった。

2.4 分析方法

Google Forms上に保存された回答データをもとに、Microsoft EXCELを使って分析を行った。

3. 結果と考察

3.1 英語音声学に対するイメージの変化 (Part 1)

表2は、学生の英語音声学に対するイメージが本授業の受講前後でどのように変化したのかをまとめたものである。紙幅の都合上、主な回答を挙げる。

表2 英語音声学に対するイメージの変化 (原文ママ)

受講前の主な回答	受講後の主な回答
<ul style="list-style-type: none">・英語音声学に特化した授業を受けた事がなかった為、難しいイメージを持っていた。・覚えることが多く、難しいイメージ・英語の音声については前から興味を持っていたため学べるのが楽しみだった。・発音の仕方を学べる良いチャンスだと思った。・興味深い・ネイティブに近い発音を学ぶ授業・ただ発音をするだけの教科・発音記号と発音の学習・理論的なことはせずに、ただ発音をより上手にするための授業だと思っていました。・今までほとんど学んでこなかった分野だったので、不安半分と新しいことを学べるという期待半分だった。・英語音声学って何だろう？ と思っていました。・rとlの違いなどを学ぶ	<ul style="list-style-type: none">・難しいけどとってもやりがいのある教科・論理的に発音を学ぶ面白さ・もっと早い時期から学校の英語授業でこの内容を学習していれば、自信の無さを原因とした、英語を話すことに対する抵抗感が少なく済んだのではないかと考える。・今まで理解できなかった音声記号が読めるようになったりしてもっと学んでみたい分野だと感じた。・難しいが、英語を勉強するには絶対に必要なものだと感じた。・難しいけど、発音の仕組みを知ることが出来て楽しいイメージに変わりました。・発音のことを良く知ることができて、履修前よりも自分の発音に自信がついてよかったです。・自分ができるだけでなく教えることがさらに大事なんだと感じた。

受講前は、「難しそう」という回答が多く見られた一方、「楽しみだった」や「興味を持っていた」、「発音の仕方を学べる良いチャンス」といった肯定的な回答も見られた。また、「ネイティブに近い発音を学ぶ授業」や「ただ発音をするだけの教科」といった回答に見られるように、理論面の学修よりも発音の訓練をする授業といったイメージも見て取れる。

受講後の回答では、「難しいが絶対に必要なもの」や「やりがいのある教科」、「もっと学んでみたい分野」といった肯定的な回答が増加した。また、「実際に発音の仕組みを理解したり、発音記号が読めるようになったりした」や「発音に自信がついた」といった具体的な変化に関する記述も見られた。教職志望の学生からは、音声を教えることの重要性に気づくことができたという回答も見られた。

以上の回答から、学問としての難しさは残るものの、本授業の受講を通して英語音声学に対して総じて肯定的な変化が生じたことが示唆された。

3.2 授業内容について (Part 2)

表3は、Part 2の結果をまとめたものである。以下、紙幅の都合上、主なポイントに絞って結果の報告と考察を行う。

授業内容に関しては、「①授業内容は興味深かった」に対して98.9%、「②授業内容及び解説は分かりやすかった」に対して97.8%の学生が「同意する・強く同意する」と回答し、非常に高い評価であった。一方、「③授業内容は難しかった」に対しては、46.3%の学生が「同意する・強く同意する」を選んだことから、

表3 授業内容の評価

	全く同意しない	同意しない	どちらでもない	同意する	強く同意する
①授業内容は興味深かった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.1%)	16 (17.2%)	76 (81.7%)
②授業内容及び解説は分かりやすかった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (2.2%)	11 (11.8%)	80 (86.0%)
③授業内容は難しかった	1 (1.1%)	14 (15.1%)	35 (37.6%)	34 (36.6%)	9 (9.7%)
④【上記③で「同意する」または「強く同意する」を選んだ人のみ】 具体的にどの学修内容が難しかったですか	記述式の設問	記述式の設問	記述式の設問	記述式の設問	記述式の設問
⑤本授業の内容はスピーキング力の向上に役立った	0 (0.0%)	2 (2.2%)	6 (6.5%)	23 (24.7%)	62 (66.7%)
⑥本授業の内容はリスニング力の向上に役立った	0 (0.0%)	2 (2.2%)	9 (9.7%)	32 (34.4%)	50 (53.8%)
⑦本授業の内容は来年の留学に向けて役立った	0 (0.0%)	2 (2.2%)	4 (4.3%)	23 (24.7%)	64 (68.8%)
⑧本授業を通して英語学習に対するモチベーションが向上した	0 (0.0%)	1 (1.1%)	9 (9.7%)	22 (23.7%)	61 (65.6%)
⑨本授業を通して英語の音声面に対する興味・関心が高まった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	7 (7.5%)	20 (21.5%)	66 (71.0%)
⑩【教職課程受講者のみ (n = 71)】 本授業は将来英語教師を目指す上で有意義だった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.4%)	7 (9.9%)	63 (88.7%)
⑪ (通信状態を考慮せず) 先生の英語の発音は聞き取りやすかった	0 (0.0%)	1 (1.1%)	2 (2.2%)	19 (20.4%)	71 (76.3%)
⑫ PowerPoint スライドから流した音声は聞き取りやすかった	0 (0.0%)	10 (10.8%)	20 (21.5%)	31 (33.3%)	32 (34.4%)
⑬先生は一人ひとりの発音をしっかりと指導していた	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (2.2%)	14 (15.1%)	77 (82.8%)
⑭本授業で採用した教科書は学修に役立った	0 (0.0%)	4 (4.3%)	22 (23.7%)	40 (43.0%)	27 (29.0%)
⑮授業の進捗はどうか	とても遅かった 0 (0.0%)	遅かった 1 (1.1%)	普通 73 (78.5%)	速かった 8 (8.6%)	とても速かった 11 (11.8%)
⑯授業外の学修量が多かった	12 (12.9%)	16 (17.2%)	39 (41.9%)	19 (20.4%)	7 (7.5%)
⑰他の科目の学修とのバランスを図るのが難しかった	18 (19.4%)	31 (33.3%)	27 (29.0%)	9 (9.7%)	8 (8.6%)
⑱本授業を履修して良かった	0 (0.0%)	1 (1.1%)	1 (1.1%)	10 (10.8%)	81 (87.1%)
⑲本授業は英語教育学科の必修科目であるべきだ	0 (0.0%)	1 (1.1%)	4 (4.3%)	12 (12.9%)	76 (81.7%)

注 ④は記述式の設問。⑮は選択肢が他の質問と異なる。

半数に近い学生が授業内容を難しいと感じていたことが示された。

④では、具体的にどの学修内容が難しかったかを挙げるよう求め、47名から回答を得た。その結果、最も多く挙げられたのが /r/ と /l/ に代表される日本語には無い音素(子音・母音)の発音とその聞き分けであった($n=20$)。続いて、リエゾンやリダクション等を扱う「音声変化」($n=10$)、「リズムとイントネーション」($n=7$)、「発音記号」($n=5$)、「用語」($n=2$)、「その他」($n=3$)という結果となった。子音と母音の発音については、全15回の授業の3分の2程度の時間を割き、発音の仕方や全体・個人ベースの発音練習、ミニマル・ペアを使った聞き分けエクササイズ等を行ったが、依然として自信をもって発音できる段階に至っていない学生が少なからずいたことが示唆された。音声変化については、ほぼ全ての学生が本格的に学修するのが初めてであったことに加え、リエゾンやフラップ/t/、母音のリダクション、同化、強形と弱形、飲み込む音といった幅広い現象をカバーする必要性があったことから、個々の現象に対するエクササイズの量が限定され、インプットとアウトプットの機会が豊富に取れなかったことが一因として考えられる。同様に「リズムとイントネーション」についても、1.5回分の授業時間しか割くことができなかったため、深い理解及び定着に至らなかった可能性が考えられる。

本授業がスピーキング力及びリスニング力の向上にどの程度資するものであったかを問うた⑤と⑥については、それぞれ91.4%と88.2%の学生が「同意する・強く同意する」を選び、高評価となった。また、⑦の留学に向けてどの程度役立ったかについても、93.5%の学生が「同意する・強く同意する」と回答した。「⑧本授業を通して英語学習に対するモチベーションが向上した」と「⑨本授業を通して英語の音声面に対する興味・関心が高まった」についても、それぞれ89.3%と92.5%の学生が「同意する・強く同意する」と回答し、音声面に関する理論的知識やスキルに加えて、興味・関心や英語学習全体に対するモチベーションといった態度・情意面の向上にも資するものであったことが示された。さらに、教職を志望する学生においては「⑩本授業は将来英語教師を目指す上で有意義だった」に対して98.6%の学生が「同意する・強く同意する」を選択した。

上記以外の項目を含めた全体的な評価として、「⑪本授業を履修して良かった」に対して97.9%の学生が「同意する・強く同意する」と回答し、満足度が非常に高い授業であったことが示された。「⑫本授業は英語教育学科の必修科目であるべきだ」についても、94.6%の学生が「同意する・強く同意する」を選択したことから、引き続き必修科目として設定することに対する賛同を得られた結果となった。

3.3 オンライン授業について (Part 3～Part 5)

Part 3からPart 5では、オンライン授業についての感想及び評価を求めた。Part 3では、学生の受講環境及び希望する授業形態について尋ねた。「①あなたは以下のどの媒体で授業に参加しましたか(複数回答可)」に対する回答は、93名全員が「パソコン」を選択し、「スマートフォン」が4名、「タブレット端末」が1名であった。「②あなたが授業を受けていた場所にプリンタはありましたか」については、「あった」が80名(86.0%)、「いいえ」が13名(14.0%)であった。「③あなたは本授業を主にどこで受講していましたか」については、自宅の自室が最多であった。以上の内容から、オンライン授業を受講するためのデバイスを全員が確保している一方、一定数の学生がプリンタを所持していなかったことが明らかとなった。本授業に限らず、配布資料等を事前に印刷することを求める授業が多いことが予想されるため、可能な限りプリンタの購入を促すことが必要不可欠であろう。

「④(新型コロナウイルス感染症の状況に関係なく)もし授業形態を自由に選択できるとしたら、以下のどの形態を希望しますか」に対しては、最も多かったのが「対面授業」の65名(69.9%)であり、続いて「対面とオンラインのハイブリッド授業」の21名(22.6%)、「オンライン授業」の11名(11.8%)という結果になった。それぞれの回答に対する主な理由は表4の通りであった。

対面授業を希望すると回答した学生が挙げた理由は、主に①分かりやすさ、教わりやすさ、②質問のしや

表4 希望する授業形態について回答例（原文ママ）

【対面授業を希望する主な理由】

- ・実際に会って発音練習を先生に確認してもらいたい。わからないところをその場で確認できるから。
- ・発音の指導が対面授業の方がより深く音声学について学べると思う。オンラインでは一つのものに対して数人しか指導できないが対面授業は全員に対して指導ができると思うからである。
- ・画面では細かい口の動きや変化や音の変わり方が分かりづらいことがあると考えるから。
- ・PCの不具合などを気にせず行えるため。また、対面の方が指導を身近に受けられるように感じるため。
- ・音声学習は実際に対面で行った方がより質の高い授業を行うことが出来ると考えるから。
- ・対面式だと今より細かい指導が受けられそう。
- ・対面の方がわからないところをその場で聞きやすい。
- ・先生に直接質問することができる、集中力が高まる。
- ・対面授業のほうが集中でき、人とのコミュニケーションもとれるから。
- ・実際に先生とコミュニケーションをもっと取りながらやりたいと感じたから。
- ・友達と切磋琢磨したいから。

【オンライン授業を希望する主な理由】

- ・音声が聞き取りやすいから。
- ・オンラインでも非常に有意義な授業だったから。
- ・対面だと緊張しそうだし、オンラインでも十分わかりやすかったと思う。
- ・特に問題なく授業を受けられたから。
- ・顔のみが見えるためわかりやすい。
- ・家の方が周りを気にせず発音ができるから。
- ・大きい声を出さなくても機械が聞き取ってくれるから。
- ・幼い弟の感染リスクを少しでも減らすため。

【対面とオンラインのハイブリッド授業を希望する主な理由】

- ・オンラインでもとても良い授業でしたが、対面のほうが、発音チェックは良かったのかなと思ったからです。
- ・対面授業も欲しいが、オンライン授業だとどこでも受けられるため対面だと欠席しているような状況（体調不良や大怪我、入院中、通院など止むを得ないとき）の日でも場合によっては受けられるかもしれない、さらにオンデマンドならば欠席した授業を後から見ることが可能
- ・オンライン授業をやって、ずっと対面が良いと思っていたが、オンライン授業も悪くないと春学期を終えて感じたから。
- ・知識のこだけならオンラインでいいと思われたため。
- ・オンラインにはオンラインの良さがあることが分かったから。
- ・スピーキングは対面で直接指導して頂きたいが、リスニングは個別の空間で行う方が集中しやすく聞き取りやすいのかなと思ったからです。
- ・実習などは学校で行い座学は家で行いたい
- ・両者にメリットデメリットがあると思うので、ハイブリッド型が良いと思う。
- ・交通費の節約
- ・家の方が時間を有意義に使えて楽だが、テストなどは対面の方がよいと思う
- ・対面ですべき内容は対面のほうがいいです。発音に関してはオンラインのほうが安全で効率的かもしれません。
- ・対面でないとわからないこともあるが、コロナウイルスにおける弊害も考慮しなければならないため
- ・バイトとの両立のため
- ・用事があつたりして、結構時間に余裕がなかったから、すべて対面だと、より厳しくなるかなと思いました。

すさ、③コミュニケーションに大別することができる。①に関しては、発音の個別指導は対面の方が望ましいとの声が寄せられた。指導はオンライン上でも実施可能であるが、オンラインの場合は対象となる学生に他の学生の注意が集中するため緊張の度合いが高まることや、対面ではよりきめ細かなフィードバックが可能となる。②に関しては、対面の方がより気軽に教員に質問ができることが挙げられた。オンライン授業の中にはチャット機能を使って学生からの質問を吸い上げ、随時フィードバックを行う実践をしているものもあるが、授業を進めている最中にチャットが来ると授業の流れが寸断されるという可能性もある。授業時間中に質疑応答の時間を確保することや、授業終了後に教員が残り質問に対応する機会を設けるといった取り組みが求められるだろう。③はコミュニケーションに関する回答であるが、オンライン授業の場合、良い意

味での「あそび」の時間が無いため、教師や他の受講者とのラポールを構築する余地が少ないことが挙げられる。この点は、英語音声学に限らず全てのオンライン授業における課題であろう。

対面授業に続いて回答が多かったのが、対面とオンラインのハイブリット授業である。「オンラインにはオンラインの良さがあることが分かったから」や「両者にメリットデメリットがあると思うので、ハイブリット型が良いと思う」といった回答に見られるように、オンライン授業を経験することで、対面とオンライン双方のメリットとデメリットに気づき、両者の良さを生かした授業形態を望む声が上がった点は注目に値する。具体的には、授業はオンラインで試験は対面、発音練習は対面でリスニングはオンラインといったように、授業内容に応じて棲み分けを行う提案が見られた。

いまひとつ注目すべき点は、オンライン授業を希望する学生が一定数存在することである。英語音声学に関連するものとして、「顔のみが見えるためわかりやすい」や「音声聞き取りやすいから」といった理由が挙げられた。対面授業では、座席の物理的な距離の関係上、教室後方の学生は教師の口元を明瞭に見ることが困難な場面がある。また、他の学生の発音や口元の様子を観察することも難しい。一方、オンライン授業では距離に関係なく教師及び他の学生の発音や口元を確認することが可能となる。また、対面授業が再開された場合においても、新型コロナウイルス感染症が完全に終息しない限り全員がマスクの着用を求められるため、発音練習という局面においてはオンラインの方がより望ましい学修環境であると言える。その他、周囲を気にせず発音練習ができることや、集中してリスニングに取り組むことができるといった点が挙げられた。

表5は、オンライン授業中に生じたトラブルについてまとめたものである。計5つのトラブルの中で「しばしばあった・多くあった」の割合が最も高かったのが「③自分の画面がフリーズした」(20.4%)であり、以下「②PowerPointから流れる音声聞き取りづらくなった」(19.4%)、「④Zoomにすぐにログインすることができなかった」(15.0%)、「①先生の声聞き取りづらくなった」(12.9%)、「⑤Wi-Fi等の電波状況の関係でZoomから切断された」(11.9%)の順であった。上記いずれも学生個人のネットワーク環境や端末のスペック等に拠るものであり、授業担当者側が対応するのが難しいものである。本授業では、個人ベースの発音指導を毎回実施する関係で、原則として授業時間中はカメラをオンにするよう学生に指示したため、通信量が増加して上記のトラブルが生じた可能性も考えられる。学修の質を担保しながらオンライン授業特有のトラブルの発生をいかに低減させるかは、今後の課題である。

表6は、オンライン授業を受けての感想をまとめたものである(記述式の設問は除く)。「①楽しく授業に取り組むことができた」、「②授業に集中しやすかった」については、それぞれ94.6%と84.9%の学生が「同意する・強く同意する」と回答した。「③授業に緊張した」については、16.2%の学生が「同意しない・全

表5 オンライン授業中に生じたトラブルについて

	全くなかった	ほぼなかった	時々あった	しばしばあった	多くあった
①先生の声聞き取りづらくなった	14 (15.1%)	39 (41.9%)	28 (30.1%)	11 (11.8%)	1 (1.1%)
②PowerPointから流れる音声が聞き取りづらくなった	20 (21.5%)	26 (28.0%)	31 (33.3%)	14 (15.1%)	4 (4.3%)
③自分の画面がフリーズした	31 (33.3%)	26 (28.0%)	22 (23.7%)	12 (12.9%)	7 (7.5%)
④Zoomにすぐにログインすることができなかった	29 (31.2%)	31 (33.3%)	22 (23.7%)	11 (11.8%)	3 (3.2%)
⑤Wi-Fi等の電波状況の関係でZoomから切断された	45 (48.4%)	23 (24.7%)	15 (16.1%)	10 (10.8%)	1 (1.1%)

表6 オンライン授業を受けての感想

	全く同意しない	同意しない	どちらでもない	同意する	強く同意する
①楽しく授業に取り組むことができた	0 (0.0%)	0 (0.0%)	5 (5.4%)	23 (24.7%)	65 (69.9%)
②授業に集中しやすかった	0 (0.0%)	0 (0.0%)	14 (15.1%)	23 (24.7%)	56 (60.2%)
③授業中に緊張した	5 (5.4%)	10 (10.8%)	23 (24.7%)	34 (36.6%)	21 (22.6%)
④授業中、気が緩むことがあった	21 (22.6%)	23 (24.7%)	24 (25.8%)	20 (21.5%)	5 (5.4%)
⑤オンラインの授業形態に慣れるまで時間がかかった	3 (3.2%)	8 (8.6%)	18 (19.4%)	41 (44.1%)	23 (24.7%)
⑥Zoomの操作方法に慣れるのに時間がかかった	12 (12.9%)	15 (16.1%)	24 (25.8%)	27 (29.0%)	15 (16.1%)
⑦他の受講生との交流を深めることができた	5 (5.4%)	14 (15.1%)	34 (36.6%)	21 (22.6%)	19 (20.4%)
⑧ブレイクアウトセッションでのペアまたはグループ練習は有益だった	1 (1.1%)	4 (4.3%)	15 (16.1%)	33 (35.0%)	40 (43.0%)
⑨カメラをオンにすることに抵抗を感じた	33 (35.5%)	26 (28.0%)	15 (16.1%)	15 (16.1%)	4 (4.3%)
⑩先生の顔が見えて良かった	2 (2.2%)	0 (0.0%)	4 (4.3%)	16 (17.2%)	71 (76.3%)
⑪他の受講生の顔が見えて良かった	4 (4.3%)	1 (1.1%)	20 (21.5%)	24 (25.8%)	44 (47.3%)
⑫他の受講生の前で発音をする機会があって良かった	1 (1.1%)	4 (4.3%)	26 (28.0%)	32 (34.4%)	30 (32.3%)
⑬他の受講生の発音が聞いて良かった	1 (1.1%)	1 (1.1%)	12 (12.9%)	23 (24.7%)	56 (60.2%)
⑭オンラインで実施した試験は取り組みやすかった	0 (0.0%)	8 (8.6%)	18 (19.4%)	40 (43.0%)	27 (29.0%)
⑮一对一の発音の実技試験を実施して欲しかった	2 (2.2%)	10 (10.8%)	29 (31.2%)	27 (29.0%)	25 (26.9%)
⑯オンライン授業は取り組みやすかった	1 (1.1%)	5 (5.4%)	24 (25.8%)	39 (41.9%)	24 (25.8%)

「全く同意しない」と回答したが、その要因として挙げられるのが、個人ベースの発音であったと考えられる。授業では一人ひとりの学生をランダムに指名し、個別指導を行ったが、指名された学生にクラス全員の注意が一斉に向けられ、特に繰り返し発音をするよう促された場合において緊張感が高まったと推察される。その一方、「④授業中、気が緩むことがあった」に対して、26.9%の学生が「同意する・強く同意する」を選択した。Zoomを使った授業では、授業時間のほぼ全てにおいて教師が画面共有をするため、画面には教師と学生自身を含む数名の画面しか表示されない。それにより、学生にとっては「先生に見られていない」という感覚が生じやすかったと推察される。また、授業中は体を動かさずひたすら端末の画面を見ることになるため、集中力が途切れる場面が生じたことも考えられる。

受講生同士の関係に関する「⑦他の受講生と交流を深めることができた」については、20.5%が「同意し

ない・全く同意しない」、36.6%が「どちらでもない」と回答した。その一方、「⑧ブレイクアウトセッションでのペアまたはグループ練習は有益だった」については、78.0%の学生が「同意する・強く同意する」を選択した。「⑨カメラをオンにすることに抵抗を感じた」については、「同意する・強く同意する」を選んだ学生は20.4%であり、約8割の学生は大きな抵抗を感じなかったことが示された。また、⑩と⑪に対して「同意する・強く同意する」と回答した学生はそれぞれ93.5%と73.1%であり、教師や受講生同士の顔が見えることによってクラスとしての一体感を得ることに繋がったものと推察される。⑫と⑬は、クラスの前での個別発音指導に関する項目であったが、それぞれ66.7%と84.9%が「同意する・強く同意する」を選んでいった。教員志望の学生にとっては、杉本・内田（2020：26）が指摘する通り、将来教壇に立った際、児童・生徒の様々な発音を聞いて評価し、適切なフィードバックを与えるスキルが求められるため、個別発音指導は有意義な活動であったと考えられる。

⑭と⑮は評価に関する項目である。本授業では2回の試験を実施したが、いずれも解答用紙を事前に印刷し、PowerPointスライドに1問ずつ表示された問題を制限時間内に解き、回答をGoogle Formsを使って送信するという手順を踏んだ。BlackboardやGoogle Formsといった複数のプラットフォームを使い、さらに1問1問に対して制限時間内に回答を求められるという点において学生に大きな負担がかかったと予想されたが、⑭では72%の学生が「同意する・強く同意する」を選択したことから、概ね問題無く取り組むことができたことが示唆された。⑮は一对一の実技試験について問うた項目であるが、55.9%の学生が「同意する・強く同意する」を選び、実施の是非について意見が二分する結果となった。本年度は実技試験を実施しなかったが、到達度を評価する上で実施が強く望まれるものであるため、どのように授業に組み込んでいくかを今後検討することが求められる。

上記内容を総合した⑯では、67.7%の学生が「同意する・強く同意する」と回答し、約7割の学生にとってオンライン授業は取り組みやすかったことが示された。

3.4 授業で取り上げて欲しかった/もっと深く学びたかった内容 (Part 6)

Part 6では、授業に関するその他の項目を尋ねたが、紙幅の都合上、授業で取り上げて欲しかったまたはもっと深く学びたかった内容に絞って結果を報告する。学生からの回答には、地域別の発音の違いやイギリス英語、発音記号の覚えやすい覚え方、音声変化、リズムとイントネーション、実際の会話（映画等を含む）、1文ではなく長文を発音する練習、練習問題といった項目が挙げられた。国際語としての英語の多様性については、第14回の授業後半で「アメリカ英語とイギリス英語」という単元を扱ったが、時間の制約上概論に留まり、幅広いバラエティを取り上げることができなかった。また、音声変化やリズムとイントネーションについては、理解するのが難しかった項目として多数挙げられたものであることから、より多くの時間を割いて丁寧な解説が必要であったと考えられる。さらに、授業では単語単位での発音練習や聞き取りが大きなウェイトを占めていたため、センテンス及びディスコース単位での練習や、学修内容が反映されている現実世界でのやり取りを素材に含めることなどが必要となる。

4. おわりに

本稿では、本学の学生がEnglish Phoneticsの授業内容及びオンライン授業をどのように評価するのかを、アンケート調査を通して検証した。授業内容については、全体を通して非常に高い評価となり、英語音声学に関する知識・スキルの向上のみならず、興味・関心の向上や英語学習全体に対するモチベーションの向上にもつながったことが示された。改善点を踏まえ、次年度以降の更なる充実化を図ることが求められる。

オンライン授業については、ネットワーク等に関するトラブルが一定割合で生じたものの、全体の約7割の学生が取り組みやすかったと回答した。また、約7割が対面授業を希望した一方、ハイブリッド授業やオ

ンライン授業を希望する学生が一定数いた点も見逃ごせない。これは、「質的な面において、オンライン授業は対面授業に劣る」という一般的な信念に一石を投じるものである。ポスト・コロナを見据え、オンライン授業を含めた大学授業のあり方について更なる議論が求められるが、「対面かオンラインか」という二項対立的な発想に縛られず、両者を有機的に統合させる方向が現実的であろう。そのためにはオンライン授業の実践例を蓄積し、知見を共有することが必要不可欠である。本研究がその一助となれば幸いである。

【引用文献】

- 折井麻美子「英語音声教員研修の必要性—発音指導に関する中学校教員の意識調査から」『早稲田大学教育・総合科学学術院学術研究（人文科学・社会科学編）』第63号、2015年、203-222ページ。
- 河内山真理・有本純「教員研修における発音指導に対する教員の意識」『教育総合研究叢書』第9巻、2016年、155-163ページ。
- 河内山真理・有本純・中西のりこ「教職課程における英語発音指導の位置付け」『Language Education & Technology』第50号、2013年、119-130ページ、外国語教育メディア学会。
- 河内山真理・山本誠子・中西のりこ・有本純・山本勝巳「小中学校教員の発音指導に対する意識—アンケート調査による考察」『LET関西支部研究集録』第13号、2011年、57-78ページ。
- 柴田雄介・萬谷隆一・多良静也「英語発音指導に関する実態調査」『四国英語教育学会 紀要』第28号、2008年、47-58ページ。
- 杉本淳子・内田洋子「英語教員養成における音声学教育—日本人英語教員のための『教職音声学』試案」『音声研究』第24巻、2020年、22-35ページ、日本音声学会。
- 手島良「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について—発音指導の現状と課題」『音声研究』第15巻、2011年、31-43ページ、日本音声学会。
- 東京学芸大学「文部科学省委託事業『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』平成28年度報告書」2017年、Retrieved from <http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/>（最終閲覧日：2020年8月3日）
- 日本音声学会「指導要領に定める英語音声教育実現のための提言—『音声に関する科目の履修を英語の教員職員免許状取得の必須条件とすること』」2017年、Retrieved from <http://www.psj.gr.jp/jpn/wp-content/uploads/2017/06/20170525.pdf>（最終閲覧日：2020年8月3日）
- 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 外国語編 英語編』2018年、開隆堂。
- 松宮新吾「小学校外国語活動担当教員の授業指導不安にかかわる研究（授業指導不安モデルの探求と検証）」『関西外国語大学 研究論集』第97巻、2013年、321-338ページ。
- Uchida, Y., & Sugimoto, J. (2019). Non-native English teachers' confidence in their own pronunciation and attitudes towards teaching: A questionnaire survey in Japan. *International Journal of Applied Linguistics*. Advance online publication, 1-16.